

関西地方を秋の豪雨が襲った夜、新幹線のダイヤは大幅に乱れて、大阪に出張中の私はとうとう最終の新幹線に乗りそびれてしまった。

翌日の早朝、大阪市内のホテルでコーヒーを飲みながら窓の外を見ると、豪雨が過ぎて見事に晴れ上がった青空に、クレヨンで描きなぐったような高い雲がどこまでも続いていた。コーヒーを飲み終えて、急に思い立った。

飛鳥へ、行くことにした。

飛鳥。現在の奈良市から真南へ約二十キロ、現、奈良県高市郡明日香村の一带に栄えた古代の都である。

今から約千四百年前の西暦五九三年、推古天皇が飛鳥の皇居、豊浦宮で即位し、西暦七一年に平城京（現在の奈良市一帯）に都が移るまでの百年余の間が飛鳥の時代といわれている。その後ふたたび飛鳥に都が戻ることはなかった。

古都、飛鳥と呼ばれる領域はせいぜい三十平方キロほど。壮大な古建築群が現存する奈良市周辺に比べ、ここには往時の繁栄を目のあたりにできる寺院や建物はほとんど見あたらない。古墳や苔むす石仏、巨石群が田園ごしに散在する、のどかな田舎町である。春には田一杯の蓮華（れんげ）、秋には曼珠沙華（まんじゅしゃげ）が畔道に沿って深紅の冠をもたげ

る。

大阪・天王寺から飛鳥へは近鉄電車で一時間ほど。平日の車内はひっそりとしていて、まばらな乗客が各駅停車の電車の揺れにまかせて居眠りをしていたり、ぼんやりと窓の外を見やっていた。電車のなかの不思議な静けさが古代の町への小旅行にはふさわしく思われて、私は電車が進むごとに 古代へとトコトコさかのぼっていくような錯覚を感じた。

電車は大阪と奈良の県境、二上山のふもとを過ぎ、「橿原神宮前」駅を経て、「飛鳥」駅に着いた。

駅舎を出ると、炎天の陽射しのなかに人影はほとんどない。

駅前に掲げられた市街図をながめている私に、のろのろと走り寄ったタクシーに飛び乗った。車内はエアコンの冷気が心地よく、みるみる汗がひいていく。

「どちらへ参りましょう？」

「高松塚古墳から、天武・持統天皇陵へまわってもらえますか」

「はい、承知いたしました」

糊のきいた白いワイシャツ姿の、五十歳ほどの運転手さんが丁寧に歯切れよく応えてくれた。

「どちらからですか？」

車が動き出し、首を斜めに私を振り向いた運転手さんが柔和な表情で話しかける。

「親しみのある関西弁である。」

「広島からです」

「そうですね。乗っていただいて、ほんとにうれしいですわあ。おおきに、ありがとうございませう」

夏休みが過ぎ、秋の行楽シーズンまではしばらく間のあるこの時期、奈良市から南へ遠く離れたこの飛鳥の町に観光客の姿は見当らなかつた。

タクシーは周辺の景色をゆっくりと楽しめる、ほど良いスピードで野道を東の山腹にむけて走る。

「高松塚古墳も発見された当時は大変なブームだったらしいですが、今ではわざわざ訪ねる人もまばらになりましたわ。奈良は次から次へと新しい発見がありますさかいに」
 運転手さんは気忙しくハンドルを回して、車を山あいの細道へ踏み入れながらつぶやいた。

その日の私は、昭和四七年（一九七二年）の発見当時、日本中を沸かせた高松塚古墳の極彩色壁画の模造画や墳墓のたたずまいを見学したのち、天武・持統天皇陵墓をまわって橿原神宮（かしわらじんぐう）に出、近鉄京都線を経て広島へ帰ろうという計画だった。明るいうちに広島に着ける、と。

高松塚古墳近くにタクシーを留め、私は古墳の上にびっしりとおい茂った竹林の坂道を下りた。竹林をわたるサワサワという風の他は音もなく、蝉の声も絶えた辺りは人影もない。古墳の周辺を巡ってタクシーに戻ると、その運転手さんはエンジンをかけたまま強い陽射しのなかを威儀を正して車外に立ち、私の帰りを待っていてくれた。

私が恐縮して礼を言くと、その運転手さんは車のドアを開けながらこたえた。

「いやいや、お客様に暑いなかを足もとの悪い山道を登ったり、降りたり歩いてもらうのに、運転手の私だけがクーラーの効いた車のなかでお待ちすることなんて、でけません」
 山道の起伏をたどって息を荒らげ、汗をかきかき車にもどった私は、運転手さんの言葉に、冷たい麦茶を差し出されたような涼やかな気分になった。

運転手さんの名前は佐々岡博さん。飛鳥駅の近く、壺阪山のふもとにある小さなタクシー会社の社員である。

「近頃は家庭の奥さん方が皆さん運転免許を持つてはるから、夜遅うに大阪から帰られるご主人を駅までお出迎え、ですわ。タクシーにや乗ってもらえんようになりました。おまけに観光客はグルメや温泉やと、千年以上も昔に栄えた町なんかになかなか興味を持ってもらえません。このあたりにはこれといった会社や工場もおまへんしなあ」
 車中で、佐々岡さんは問わず語りに話し始めた。

年々少なくなる観光客のこと。土木工事をすれば必ずといっていいほど古代の遺物や遺跡が掘り出され、工事が止まってしまう町の特殊な事情。開発か保存かで堂々巡りを繰り返す町の行政のこと。

大阪まで一時間ほどのここ飛鳥の町にも団地が建ち始め、大都市のベッドタウンになりつつある。古代、牛車や馬、輿（こし）が往来した街路に何層もの時代の土砂が重なり、その上を今、高速で動き回る色鮮やかな鉄の車が往き来する。

タクシーが天武・持統天皇陵に近づくころ、私と佐々岡さんは運転席、客席の隔たりを越えてすっかり打ち解け、互いの身の上を語り合った。

ややあつて、佐々岡さんが朗々と和歌を詠じ始めた。

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山かくやま

よくご存じだと思えますが、万葉集にある有名な持統天皇のお歌です。ご承知のように持統天皇は女性の帝（みかど）で、天皇に即位されるまでは菟野皇女、『うののひめみこ』と名乗っておられました。

持統天皇のこのあまりにも有名な和歌を、佐々岡さんはハンドルを握りながら、二度、三度と詠じた。やや甲高い、よく通る声だった。

「百人一首にもあるこの有名な歌に隠れて、あまり知られてはいませんが、持統天皇はこれ以外にもいかにも女性らしい、ゆかしいお歌を残しておられます。

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて

菟野皇女は天智天皇の二番目の皇女で、叔父にあたる大海人皇子、のちの天武天皇にあたる方ですが、この皇子に嫁がれました。現代でいう血族結婚ですわなあ。父である天智天皇は後継者に子の大友皇子をあてようとしますが、天智天皇が崩御されたのち、この大友皇子と夫である大海人皇子との間で大変な騒乱が生まれます。今でいう会社の後継者争いですわ。そうです、壬申の乱です。

西暦六七二年にこの戦に勝った大海人皇子は、ここ飛鳥の浄御原（きよみはら）で天武天皇として即位されます。天武天皇は病気がちで、政務のほとんどは皇后である菟野皇女が執っておられました。女性ながら肝のすわった政治力のある方だったんでしょねえ、夫である天武天皇が崩御されると、ただちにその地位を継承されました。

最愛の息子である草壁皇子と、壬申の乱の折りの盟友であった甥の大津皇子が対立して、大津皇子に謀反の動きがあると知るや、即刻大津皇子を逮捕して、この飛鳥からほど近い今の桜井市で処刑してしまいます。その直後、自分の後継者として成長を待ち望んだ草壁皇子は病死してしまわれます。

骨肉相食むというか、肉親縁者入り乱れての争いや流血。そして頼りに思う夫や息子とも死別し、親族をも手にかけてしまった自分。

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて

という持統天皇のお歌。

北山にたなびいている青雲が遠くへ離れていってしまう。星たちからも離れ、そして月からも遠くはなれていってしまう。最高の権力者の地位に就いた女帝、持統天皇はんの

孤独というか、悲哀や苦悩が切ないほどに伝わってくると思われませんか？」

タクシードライバー、佐々岡さんはハンドルを握ったまま真つすぐに正面を向き、時に唾を飛ばしながら一気に語り終えた。

繰り返し詠じられる持統天皇の御製歌は、彼のやや高くかすれた声の独特の音律にかかる

と、現代の悲歌のように胸にせまってきた。「いやあ、それにしてもすごいですねえ。佐々岡さん、万葉集、ぜんぶ憶えているんですか？」

車内に次々と湧き響く万葉の歌に、私は耳を疑った。

彼は辻々の野に立つ小さな遺跡や石仏を私が尋ねると、間髪を入れずその由来や当時の政治背景、関わりのある万葉の歌をよどみなく披露してくれる。

タクシーというよりも、図書館を丸ごと詰め込んで走るトラックのようであった。

どうやら彼の頭のなかには日本の、とりわけ古代の歴史が立体的に組み立てられていて、その時代の人物像や政治的な背景に彼独特の解釈も持っているらしい。

秀でた記憶力や博識、というよりも、人間や歴史への深い見識と洞察を感じさせた。

しかも彼は日常の仕事のなかで、時代ごとに変遷した街路や地理、遺物の配置を知り尽くしている上に、この町に昔から住む古代人の末裔（まつえい）達の伝承や世情にも通じている。

「佐々岡さん、気が変わった。予定変更じゃ。今晩中に広島へ帰り着くことにして、もつと飛鳥の町をあちこち見せてもらえんじやろうか？」

「えっ、ほんまでっか？ そりゃあ、ありがたいことですわ。まだまだ、飛鳥にはめつたに人も行かんような、そりゃあ、見て頂きたいところが一杯ありますねん。会社と相談して、料金、精一杯サーブスさせてもらいますわ」

「佐々岡さん、きょうは、貸し切りじゃあ！」
後部座席から叫ぶ私の声に、彼はうれしそうにタクシーを反転させた。

*

それからというもの、年に一度、二年に一度と、私は佐々岡さんが運転するタクシーの客となった。

彼は私が大和路を訪れることを楽しみにしてくるようになった。
あらかじめ次の希望地を知らせると、彼は自分で調べたその地の歴史や地図を手書きのメモにして私に渡してくれることがあった。正月には彼らしい几帳面な字で、近況を伝える丁寧な年賀状が届いた。古代、年月や方角を表した干支（えと）を意匠した便りは、飛鳥人から送られてきたように雅びなものだった。

出張先での商談が不調に終ったり、事業の数字が長い間頭から離れないとき、彼の一貫して変わらぬ篤実な人柄に触れ、ともに大和の道を巡ると、それらがつかの間霧散するようだった。

大和の風物に触れることよりも、むしろ彼に出会うことを楽しみに奈良へ通うのかもしれない。

東京や関西への出張の帰途、途中下車して奈良へ迂回すると、私を待つ彼の黒塗りのタクシーが車体をピカピカに光らせて、駅前そのままに停められていた。

彼はいつも駅員の制止を無視してホームへ入り、顔をほころばせながら、電車から降り立つ私の手を固く握りしめる。別れるときは、その何倍もの力で私の手を握り返し、離そうとしない。数年に一度、たった半日の逢瀬（おうせ）である。

「奈良は日本の国のほぼまんなかあたりになりますわなあ。いわば、日本のへそ、ですわ。今の日本の、国家としての形はここから始まったわけです。幸い、奈良は戦争中アメリカさんの爆撃にもあわんですみました。まあ、さしたる産業もないし、お国の繁栄からも、なんかここだけ置いてきぼりだったような所ですわ。でもここは、百年、千年という単位で、日本の国の移ろいを肌で感じられる所でもあるわけですよ。私ら、『日本のへそ』の上から、北海道から沖縄、この国のありさまをながめて暮らします」



奈良や飛鳥の地をいとおしく思い、日々を淡々と送る佐々岡さんの暮らしぶりが言葉の端々からにじみ伝わってくる。

「ここへ住んでみて、思うんですわ。東京や、大阪や、人の大勢集まった街で、皆さん、景気や株や情報やゆつて、毎日気ぜわしゅうにワアワア頑張ってはる。そやかて、政治も経済も時の流れ。相手があるこつちゃ。いつもいつも、そうそう、うもういきませんかな……。」

それに、日本国中が、なんでもかんでも、早う、早う、いうて、めまぐるしいこつてすわ。なんでもスピード第一になつてしもうたら、待つ楽しみや、間(ま)ちゅうもんも、あらしません。

もしも万が一、日本の国がたちいかなようになつたら、またみんなでこの大和の国から、一歩から出直しゃええやないか、思いますねん。

都会の人も、不遇のときは故郷のことを思い出しますやる？ 大和の国は、日本のふるさとなんやから

タクシーのなかでの佐々岡さんとの世間話は、いつもこんな調子だった。

私は苦笑いしながら、彼の話に聞き入る。

彼と私は春盛りの三輪山のふもとで素麺を食べ、紅葉の談山神社で中大兄皇子と藤原鎌足たちの謀議を語りあった。

偶然にも佐々岡さんは広島生まれだった。

太平洋戦争が始まった昭和一六年に生まれた彼は、乳児の頃にお母さんの実家のある島根県浜田市郊外に転居し、そこで育った。

「広島へ原爆が落ちて二、三年経つた頃でしょうか。母に連れられて広島に行ったことがあるんです。当時、浜田を夜九時頃出る広島行きバスがありましてなあ。

中国山地をエンヤラエンヤラ、息を切らせてオンボロのバスが登るんですわ。石見今市、坂本、三坂峠、大朝、今でも憶えています。大朝でガソリンを注いでひと休み。加計を通つて広島横川へ着くのは朝の六時頃でした。今なら、高速道路でたったの二時間でっしやる？ 田舎育ちの私にとって、当時の広島といやあ、そりゃあもう大都会でした。

その広島が原爆で見渡す限りの廃墟になってました。飴のようにねじ曲がった大きな鉄骨があちこちに倒れていて、横川の駅からも海が見渡せました。

戦(いくさ)とはいえ、ひどいことしやる、幼な心にそう思いました

学校を卒業して大阪へ出た彼は、道修町の薬品商社に就職した。二九歳で結婚。箕面市に所帯を持った。

「三十一のときに初めてポーターナスで扇風機ちゅうもんを買いましたん。うれしかったですわあ。今の家にはエアコンなんて当たり前やけど、あの時の扇風機、忘れさせん。狭うて暑い借家で、嫁はんとかわるがるに扇風機の風を顔にあてて、」

「ええなあ、ええなあ」

ゆつて二人で言い合つたもんですわ。ちょうどその頃、箕面市に日本で初めてちゅう、アメリカ資本のミスタードーナツちゅう店が出来ましてねえ。いろんな種類の、しかも、あつたかいドーナツちゅうもん、初めて食べましたわ。うまかつたですわあ。なんでもかんでも、アメリカさんの言いなりやなあ、思いました

しばらくして、奈良県飛鳥の里に自宅を購入した彼は、大阪市内に通勤し始める。

「会社の先輩や同僚は、若いのに家なんか買つて、転勤になつたらどうすんねん、言いました。でも私は十歳の時に父親を亡くして以来、いつか自分の力で家を建てたい、きちんとした自分の城を持ちたい、思い続けてましてん。そのために、就職したときから、わずかつ

つ備えをしてたんですわ」

飛鳥時代の面影の残る町に幼い頃からの夢であった城をもった彼は、体の不調もあって、大阪市内への通勤をあきらめ、地元のタクシードライバーに転職する。四五歳のときであった。

島根県の田舎町に育った彼は飛鳥の町に移り住み、そこで働くことで、老後も見通せる安らぎを覚えるようになった。

しかし、彼のタクシー運転手としての道は平坦ではなかった。

「なんちゅうても、飛鳥の町は舗装もされていない、細い田舎道が多おまつしやる？ まず、道を覚えるのにほんまに苦労しましたわ。地図にも載ってへんような細道がいっぱいありますねん。何年もかかりました」

タクシーのなかつて、ホンマ、人生の束の間の舞台ですねん。家族からも見放された息絶え絶えのお年寄りを病院に担ぎこんだり、酔っ払いのお客さんにしつこくからまられたり、女性のお客さんにワアワア泣かれて愚痴を聞かされたり

「純朴な彼が新米のタクシー運転手として右往左往する姿が目に見えなくて、思わず笑いがこみあげてくる。」

「奈良は数えたらキリがないほどお寺や神社、遺跡がありますやろ。」

お客さんに聞かれますねん。あの寺、なんちゅう寺？ このけつたいな石、なんやねん？ て。こう見えても私、若い頃はアウトドア派で、冬にはスキーや登山やいうて結構あちこちしてましてん。歴史のことなんか関心もないし、線香臭いお寺のことなんか、さっぱりでしたわ。

でも、年のせいもあるんでしょうかねえ、いろんなこと、考えますねん。好きで移り住んだ飛鳥の町や。それに、自分で選んだ運転手の仕事や。この町に住んではるお客さんや、遠方から来られるお客さんが私の車に乗ってくれはるお陰で、私ら家族は生きていける。

運転技術やマナーはもちろんのこと、この町のことはお客さんから何を尋ねられてもお答え出来る、お客さんに満足していただける、プロフェッショナルと言われる運転手にならなあかなあ、思い始めましてん。

それからですわ、勉強始めたんは。少しずつ解つてくると、だんだん面白うなつてきましてなあ

町の情勢や近郊の地理を会得した佐々岡運転手は、一日の仕事を終えたあと、日本史や古代史の勉強を始めた。四十を半ば越えた彼が歴史の年表を理解するには、若い頃の三倍も四倍もの労力が必要だった。

勤務を終えたあと、ビデオに録画しておいた教育テレビを見ながらメモをとる。地元で開かれる発掘調査の現地説明会には可能なかぎり顔を出す。「万葉は生まれた風土ぬきには理解できない」という識者の言葉に従って、休日には資料を手に一円の遺跡や寺社をたずね歩いた。

全二十巻、約四千五百余首におよぶ万葉集はその文字だけでなく、その歌が生まれた場所に立って朗々と吟詠することで、万葉の音律を体にしみ込ませた。

歴史と遺物、そしてそこで生まれた万葉の詩歌が、彼のなかで骨と筋肉と神経のように立体になっていった。

彼が恩師と呼ぶ人は、仏像製法や修復の大家で京都・愛宕念仏寺住職でもある西村公朝さん、歌人の前登志夫さん。いずれもNHK市民大学講座などを視聴することで、彼が自分で決めた恩師なのである。

人はさまざまな思いを抱いて、遠くから飛鳥を訪れる。そこには壮大、絢爛（けんらん）

たる仏閣や仏像があるわけではなく、草木に覆われた土中からのぞく石仏や礎石が立ち並ぶだけである。飛鳥人の夢のあとは幾層もの深い土におおわれて眠っている。
ある人は飛鳥を「想像の古跡」と呼ぶ。その土地に触れ、人に触れることで、万葉の当時を想像する他にないのである。その地で、しばしの時であれ、たまたま彼のタクシーに乗りあわせたことで、どれだけの人が飛鳥をなおさらに忘れがたいものにしたことだろう。

何度目かの奈良での出会いのあと、たそがれの田園のなかを私を駅まで送る車中、佐々岡さんはハンドルを手に語りかけた。

「飛鳥の道のほとりにこんな歌を刻んだ石碑があるんです。

世のなかの繁しげき假かり廬いろうに住み住みて 至らむ国のたづき知らずも

うるさい仮かりずまいのような人の世に住み続けていて、『至らむ国』、というのは、おそらく来世のことでしょうね、これからどんな様子の来世へ行きつくんだろう、という意味だと思います。

万葉集というのは天皇さんや貴族のような高貴な人たちがばかりの歌じゃのうて、身分の低い庶民の哀あはれ歡あはれをうたったものも集められていますわな。この歌もおそらくそんな庶民の素朴な思いを歌にしたもんでっしゃる。人の暮らして、今も昔も同じですわ。

わたしねえ、この一帯にある壮大な仏閣や陵墓を見るたびに想像しますねん。権力や家柄とは縁もない無数の民草（たみくさ）のことを想像するんです。

歴史の記録にその名はカケラも残ってへんけど、本当は、彼らが日本の歴史を築いたんや、つて。

御輿（みこし）に乗る貴い人、その御輿の二本の支棒を担いだ人もあれば、権力者の死後に、途方もない墓を造るために巨石を運ぶ修羅（しゅら）を引いた農民たちや奴隷同様の人々たち。

わたし思いますねん、彼らは日々何を楽しみにして、生きがいにして、当時を生きていたんやらかつて。彼らは一日中、石を運んだり穴を掘ったり、陽が暮れたらわずかな米や粟（あわ）を与えられて家路についたんでしょ。そこには愛する家族や恋人が待ってたことことでっしゃる。

持統天皇はんが夫を思い、子を思う気持ちとまったく同じなんです。

わたし、箕面みづので初めて所帯しよたいを持って、ポーナスで扇風機せんぷうきを買って帰ったとき、嫁はん、えらい喜んでくれました。私は便利な道具を手に入れたことがうれしいんやのうて、嫁はんの喜ぶ顔を見ることがうれしかったんですわ。

六十に近いオッサンがこんなこと言うて、なんや青くさい、って思わはるかも知れませんが、わたし、歴史しつて、人間にんげんて、やつぱり『愛』や、思いますねん。

親が子に寄せる愛、夫婦の愛、男と女の愛、兄弟の愛 『愛』があるからこそ人は生きていける。そんなんが積もり積もって人間の歴史を作る。

生きていくには、愛あいが必要ひつやうなんや。

たまさか、その人が権力をもってるから、愛が業（ごう）につながつて、悲劇を生む。永遠の富も命も、永遠の愛もあらしまへんのになあ。

万葉集のほとんども、人を想う心で埋められていますわ。

ああ、もう、そろそろ西大寺の駅ですわ。

ほんま、よう来てくれはりました。きょうもお陰さまで楽しい一日でした。お仕事、いろいろ大変でっしゃるけど、体気ていきいつけてくださいねえ。むやみな欲出したらあきませんよあ。今度はいつ、お会い出来こますやろなあ」